

令和4年度

学校防災ボランティア事業

活動報告書

令和5年1月6日（金）～9日（月）

もくじ

1	活動の概要	1
2	主な活動内容	3
4	参加者一覧	7
5	参加生徒のレポート	8

1 活動の概要

(1) 趣 旨

近い将来南海トラフ地震の発生が危惧される三重県では、県内の高校生が自らの命を守り抜くことに加え、支援者となり得る視点から、安全で安心な社会づくりに貢献できる知識や能力を習得することが求められています。

そこで、県内の高校生を福島県や宮城県の被災地に派遣し、現地の方々との交流やボランティア活動、被災体験・復興についての学習や現地高校生との防災合同学習を行うことなどにより、大規模な自然災害発生時に地域で自ら行動できる防災人材の育成に取り組みます。

(2) 期 間 令和5年1月6日(金)から1月9日(月)まで 3泊4日

(3) 訪問先 福島県浪江町、双葉町、宮城県東松島市、石巻市、涌谷町

(4) 参加者 計47名

【高 校 生】34名(県立28名、私立6名)

【引 率 者】13名

大学教授 1名、養護教諭 1名、教諭 3名、大学生 4名、
県防災対策部 1名、県教育委員会事務局 3名

(5) 日程ならびに内容

日 程	内 容
第1日 1月6日 (金)	午前：出発【三重県内各地から福島県まで移動（鉄道及びバス）】 午後：①震災遺構 浪江町立請戸小学校 視察（浪江町） ②東日本大震災・原子力災害伝承館 視察（双葉町） ③福島県の高校生との交流 宿泊：東松島市内ホテル
第2日 1月7日 (土)	午前：④東松島市あおい地区でのボランティア交流 午後：⑤講話「災害医療とこころのケア」（講師：岩佐 郁子さん） ⑥講話「避難所の設置と運営協力」（講師：齋藤 幸男さん） ⑦講話「復旧・復興と被災者支援」（講師：小野 竹一さん） 宿泊：東松島市内ホテル
第3日 1月8日 (日)	午前：⑧震災遺構 門脇小学校 視察（石巻市） ⑨宮城県涌谷高校生徒との防災合同学習（涌谷町） 午後：⑩震災遺構 大川小学校で語り部による講話（講師：佐藤 敏郎さん） ⑪講話「行政の立場からの集団移転時のまちづくりについて」 （講師：難波 和幸さん） ⑫講話「災害ボランティア活動」（千葉 貴弘） 宿泊：東松島市内ホテル
第4日 1月9日 (月)	午前：出発【宮城県から三重県まで移動（鉄道及びバス）】

2 主な活動内容

【1日目 1月6日（金）】

①震災遺構 浪江町立請戸^{うけど}小学校 視察（福島県浪江町）

海岸から300mの距離に立地するが、学校にいた児童は集団で山手をめざし無事避難できた請戸小学校。浪江町教育委員会の職員の方から説明を受けながら、校舎内の展示室を見学。生徒は、最初の被災施設の訪問ということもあり、津波で破壊された校舎内の状況を目の当たりにし、強い印象を受けたようだった。



解説を聞く生徒



写真を撮る生徒

②東日本大震災・原子力災害伝承館 視察（福島県双葉町）

③福島県の高校生との交流

双葉町にある伝承館にて、2グループに分かれて、展示室の見学と福島県立あさか開成^{かいせい}高校、相馬^{そうま}高生と交流を行った。

あさか開成高校からは今も風評被害が残っていることなどをクイズ形式にした発表、相馬高校からは新聞部員として震災を伝え続けていることについての発表があった。

三重県からは、これまでの災害や防災学習について発表した。



クイズに答える三重県生徒



発表する三重県生徒

【2日目 1月7日（土）】

④宮城県東松島市あおい地区でのボランティア交流

10グループに分かれてあおい地区の災害公営住宅（高齢者のご自宅）に清掃ボランティアに伺った。清掃後に東日本大震災時の話を聴かせていただいた。

昼食時間にあおい地区の見守り部会の方々の話を聴き交流した。



清掃ボランティアを行う生徒



住民の方の話を聞く生徒

⑤講話「災害医療とこころのケア」（あおい地区集会所）

石巻赤十字看護専門学校元教員の岩佐郁子^{いわさいくこ}氏に講話をしていただいた。



岩佐氏



挨拶する生徒

⑥講話「避難所の設置と運営協力」（あおい地区集会所）

東北大学非常勤講師の齋藤幸男氏に講話をしていただいた後、対話と会話のちがいなどについて、グループで話し合った。



齋藤氏



グループセッションの様子

⑦「講話「復旧・復興と被災者支援」(あおい地区集会所)

あおい地区会長の小野竹一氏おのたけいちに講話をしていただいた。



小野氏



メモを取る生徒

【3日目 1月8日(日)】

⑧石巻市震災遺構 門脇小学校視察(宮城県石巻市)

学校にいた児童は裏山に無事避難したが、周辺から延焼した門脇小学校。津波被害や生徒の避難についての動画を見た後、各自展示室の見学を行った。



写真を撮る生徒



展示室を見学する生徒

⑨宮城県涌谷高校生徒との防災合同学習(宮城県涌谷町)

両県の高校生が8グループに分かれ着席。三重県の災害・防災学習の発表、涌谷高校による防災の取組を発表。

その後、「24時間後に地震が起きたら、今から何をやる？」をテーマにグループワークを行った。



グループワークの様子



集合写真

⑩石巻市震災遺構 大川小学校での語り部による講話（宮城県石巻市）

校舎外の被害の状況を目の当たりにしながら、大川伝承の会 さとうとしろう 佐藤敏郎氏の話聞き、
請戸小学校と同様、生徒は強い印象を受けたようだった。



佐藤氏（右側）



学校の裏山を登る生徒

⑪講話「行政の立場からの集団移転時のまちづくりについて」（あおい地区集会所）

なんばかずゆき 東松島市役所商工観光課長の難波和幸氏に講話をしていただいた。



難波氏



生徒の様子

⑫講話「災害ボランティア活動」（あおい地区集会所）

ちばたかひろ 東松島市社会福祉協議会事務局次長の千葉貴弘氏に講話をしていただいた。



千葉氏



お礼の言葉を使う生徒

4 参加者一覧

【生徒】

番号	市町名	学校名	学年	名前	ふりがな
1	いなべ市	いなべ総合学園高等学校	2	因 千寿	いん ちひろ
2	川越町	川越高等学校	1	早川 周	はやかわ あまね
3	四日市市	四日市高等学校	2	有竹 紗璃	ありたけ さり
4	四日市市	四日市高等学校	2	田口 竣一	たぐち しゅんいち
5	四日市市	四日市高等学校	2	中野 真菜	なかの まな
6	四日市市	四日市高等学校	2	伴野 優貴	ばんの ゆうき
7	四日市市	四日市高等学校	2	宮部 仙士	みやべ ひさし
8	四日市市	四日市西高等学校	1	中村 優太	なかむら ゆうた
9	津市	津高等学校	1	加藤 勇杜	かとう ゆうと
10	津市	津工業高等学校	2	伊藤 秀	いとう しゅう
11	津市	津工業高等学校	2	福島 潤	ふくしま じゅん
12	津市	津工業高等学校	2	別所 陽音	べっしょ はると
13	津市	津工業高等学校	2	安田 弦生	やすだ げんき
14	津市	セントヨゼフ女子学園高等学校	1	松本 和華	まつもと わか
15	津市	セントヨゼフ女子学園高等学校	1	宮口 真緒	みやぐち まお
16	津市	高田高等学校	1	高堀 真央	たかぼり まさお
17	津市	高田高等学校	1	治田 優花	はるた ゆうか
18	津市	高田高等学校	1	平井 里佳	ひらい りか
19	松阪市	松阪高等学校	2	山本 楓莉	やまもと ふうり
20	大台町	昴学園高等学校	2	西野 もも	にしの もも
21	伊勢市	宇治山田高等学校	2	上ノ町 友哉	うえのまち ともや
22	伊勢市	宇治山田高等学校	2	二見 新汰	ふたみ あらた
23	伊勢市	宇治山田高等学校	2	丸山 真之介	まるやま しんのすけ
24	伊勢市	伊勢まなび高等学校	3	池山 愛理	いけやま あいり
25	伊勢市	伊勢まなび高等学校	2	山口 冬人	やまぐち ふゆと
26	伊勢市	皇學館高等学校	1	中井 美衣奈	なかい みいな
27	名張市	名張高等学校	2	秋田 真穂	あきた しおん
28	名張市	名張高等学校	2	山中 涼加	やまなか すずか
29	御浜町	紀南高等学校	2	石垣 茅愛	いしがき ちなり
30	御浜町	紀南高等学校	1	亀石 沙來	かめいし さら
31	御浜町	紀南高等学校	1	田中 絆愛	たなか りあん
32	御浜町	紀南高等学校	1	檜作 和香	ひづくり ほのか
33	御浜町	紀南高等学校	1	堀口 心愛	ほりぐち このあ
34	御浜町	紀南高等学校	1	横辻 胡々乃	よこつじ ここの

【引率者】

	所属	役職	名前	ふりがな
1	四日市大学	副学長・教授	鬼頭 浩文	きとう ひろふみ
2	鈴鹿市立清和小学校	養護教諭	森 啓子	もり けいこ
3	四日市高等学校	教諭	伊藤 泰二	いとう たいじ
4	紀南高等学校	教諭	込谷 徳隆	こみや のりたか
5	紀南高等学校	教諭	南部 美玖	なんぶ みく
6	四日市大学	3年生	野田 満世	のだ みつよ
7	四日市大学	1年生	落合 海吏	おちあい かいり
8	三重大学	1年生	松下 航汰	まつした こうた
9	皇學館大学	2年生	渡邊 晟	わたなべ じょう
10	三重県防災対策部	主事	寺田 誠	てらだ まこと
11	三重県教育委員会事務局	課長	森岡 賢治	もりおか けんじ
12	三重県教育委員会事務局	主幹	深田 勝利	ふかた かつとし
13	三重県教育委員会事務局	係長	佐々木 晃	ささき あきら

5 参加生徒のレポート

いなべ総合学園高等学校 2年 因 千寿

私は高校2年の1月、防災ボランティアとして東北を訪れた。近い将来自分の身に降りかかるであろう「南海トラフ巨大地震」に備え、事前に少しでも災害を自らの肌で感じておくことが有意義な経験となり、またその必要があると考え参加を決意した。今回は34名の学生が参加し、4日間活動を行った。1日目朝早く集合し約3時間で福島県に到着した。午後から福島県の請戸小学校を視察し、東日本大震災伝承館へ行った。ここでは、展示物を通して震災の記録、その後の復興の過程を学ぶことができた。2日目は10グループに分かれて1世帯4人程で災害公営住宅の台所まわりの清掃を行った。3日目は午前中、震災遺構である門脇小学校の見学、地元の高校生と合同学習会を行った。防災について皆と意見交換することで実際災害が起こったときに具体的に自分に何ができるのか、何をすべきか多くの気づきがありとても良い経験となった。午後からは84名もの命が犠牲になった大川小学校に行った。ねじり倒されたコンクリートの渡り廊下、津波の威力で盛り上がった床は衝撃的で今まで映像や話を聞くだけでは分からなかった津波の恐ろしさを実感した。見学しながら当時大川小学校6年生の娘さんを亡くした語り部の佐藤さんの話を聞いた。大川小学校では事前にマニュアルを確認してなかったことで、大きな被害になってしまったと知った。私はいつ起きてもおかしくない災害に向けて事前に備えておくことが大切だということを改め

て感じた。そして4日目、たくさんの知識とともに三重に帰ってきた。4日間の防災ボランティアで被災地の方々との交流、清掃活動をする中で地域の協力、住民みんなの知恵、助け合いがあって今があるという言葉を書くことが多く印象的だった。そして、被災地の方と交流を通して生活人とのつながりがとても重要だということを感じた。

私は将来看護師になり、有事の際には自分や家族が命を守ることを通じて「地域の防災人材」として貢献できるような役割を果たしたい。そのために今回ボランティアで学んだことを活かして通学途中での地域の方たちへの挨拶を心がけ、被災時の円滑なコミュニケーションを目指したい。

川越高等学校 1年 早川 周

今回の学校防災ボランティア事業に参加した事で実際に自分の目で震災遺構を見たり、自分の耳で震災時の話を聞いたりして、震災についてメディアや人づてに聞くだけでは分からなかった当時何が起きていたのか、何が大切であるのかについて多くのことを知ることができました。

その中でも「大人は経験したことのないことが起きると動けなくなる」「災害時には子どもの方が優れていることがある」という2つのことが私の中で印象強く残っています。

1日目に訪問した請戸小学校では太平山へ逃げた時避難経路とされていた道路は混雑しており、通るのに時間がかかってしまうと考えられていた時、ある子どもが「先生、こっちの道から行けるよ。俺野球の時に通ったことあるよ」と言い避難経路にはなっていない道を通して避難した結果、避難した生徒、先生全員が助かったというお話を聞きました。

私はその話を聞いたとき先生ではなく子どもが言ったことでみんなが助かったんだな、凄いなと思いました。

また、2日目に行われた齋藤さんの避難所についての講話の中で「大人は縦割り社会ですぐに責任者を作ろうとする、これは普段の生活の中では安心安全であるが災害時にはスピード感がないそれに対して子どもはweb社会(横割り社会)で各グループごとに動くためスピード感がある」ということを聞きました。この話を聞いて私は大人の判断が必ずしも正しいとは限らない、自分たちで考えて動いた方が良いときがあると知りました。

私は普段の学校生活の中でさえ先生やその他の大人の指示を待ってしまいがちなのですが、この4日間、様々な話を聞く中で大人の指示を待つことももちろん大切なことですが、大人より先に子どもが動いた方が優れていることがある。特に災害発生時、その後の避難所などにおいては後者の方が大切なのもかもしれないと思いました。

1 日目、バスでの移動中、車両から降りられないレベル、放射線量約 $1\mu\text{Sv}$ の区域を通り過ぎた。12 年弱も経つがまだ時間が必要なのかと驚いた。請戸小学校の 2 階ベランダに示された津波到達線を見て、その高さを実感した。ここでは、臨機応変な対応が命が救われたことを学んだ。伝承館で、原子力発電所建設の経緯から被害状況、避難所生活についてなど幅広い展示を学んだ。

2 日目、雫石さん宅にお邪魔し、キッチン周りの掃除をした。話からは、土台ごと蔵を運べるほどのエネルギーが津波にあることを学んだ。あおい地区には一戸建て、二戸一棟建て、自力再建の住宅が混在していることを学んだ。岩佐さんの話から災害時の、主に避難所での治療について学んだ。被災した時に欲しかったものに、情報が挙げられたことは、意外だった。齋藤先生から、避難所運営の組織に求めるもの、そして我々には避難所設置に活躍の場があることを学んだ。仮設住宅からあおい地区の自治を導いてきた小野さんの話から復興をどう進めてきたのかを学んだ。地方自治の大切さがよく分かった。

3 日目、門脇小学校では訓練通りの避難ができて、命が救われたことを知り、訓練の必要性を改めて感じた。涌谷高校の町を巻き込み、防災の取り組みを行っていることはこちらでも取り入れたいと思った。大川小学校では、廃墟化した校舎を見て、津波のエネルギーの大きさを実感した。佐藤さんの話で、避難訓練の向き合い方を考えさせられた。難波さんの話からは、小野さんとは別の立場の市役所から復興について学んだ。社会福祉協議会の千葉さんからはボランティア活動において高校生の力がどう活躍したのかを知り、またボランティアセンターの働きを学んだ。3 日間を通して、様々な災害の被害、災害対応、そして復興のための活動について多角的な視点で学ぶことができた。

1 月 6 日(金)から 1 月 9 日(月)の 4 日間、福島県と宮城県を訪問し、震災、復興、防災等について様々なことを学んだ。その中のいくつかを記す。

○あさか開成高校と相馬高校の方々との交流の中で、「震災遺構を見て、大変だったのだな、と思うのではなく、今の状態まで復興してきているエネルギーを感じて欲しい」という言葉があり、この言葉にハッとさせられた。

○東松島市あおい地区の災害公営住宅で暮らす老夫妻のお宅で、ボランティア活動を行った際に、「姪の家に同居させてもらい、温かい食事を食べていたため、家族を亡くした人のことを思うと、自分のことを周りの人に話せず、つらかった」という話を聞いた。被災された方々は、本当に様々なつらさや悲しみを抱いているのだなと思った。

○災害公営住宅では、高齢の方が多く生活しているため、見守り活動が重要だということ
を学んだ。

○岩佐郁子さんと齋藤幸男さんの講話を聴いて、災害時には感染症を防ぐこと、正しい情
報が必要なこと、避難所ではこどもが大きな役割を果たすことなどを学んだ。

○涌谷高校の方々との交流の中で、「知識があっても動かない人=知識がなく動かない人」
ということを知り、持っている知識を行動に移せることが大切なのだということが分
かった。

○門脇小学校では、普段から避難訓練がしっかり行われていたため、実際に震災当時も訓
練通りに避難することができた。また、校舎から裏山へ逃げるために教壇を橋にして渡る
というようなとっさの判断で多くの命が助かったことを知った。一方、大川小学校では、
様々な助かる避難方法があったが、避難のマニュアルがしっかりしていなかったために、
多くの命が失われたことを知った。これらのことから、私は災害という非日常的なことが
起きた時に自分や周りの人の命が助かるかどうかは、日々の生活の中でどれだけ災害が起
きた時のことを具体的にイメージして、備えることができるかにかかっているのだと思っ
た。

四日市高等学校 2年 伴野 優貴

1日目は、郡山駅に着いてから請戸小学校、原子力災害伝承館に行きました。請戸小学
校を最初に見た時、1階の壁が津波で破壊されていたのが凄く衝撃的でした。テレビとか
ネットで津波10mとかはよく聞いていたけど実際どれくらいなのかという実感が全然湧
いてなかったので、津波ってこんなに強いんだってということにすごく衝撃を受けました。
また、体育館の床が抜け落ちているのを見て、地震が起きたら避難場所になるであろう体
育館も危険という事にすごく驚きました。

原子力災害伝承館では原発に津波が到達してから何があったのか、それにより福島にど
のやうな被害が出たのかを学びました。地震による被害がなければすぐれた発電方法なの
で、もっと被害の予想やそれに対する耐震設備等がすごく大切だと思いました。

2日目はあおい地区の災害公営住宅で生活されてる被災された方や震災の時赤十字の専
門学校で勤めていた方などの話を聞きました。災害公営住宅でボランティア活動したお宅
の方が、震災のあった日に普段と同じスーパーに行っていたら、そこは津波が達していた
から死んでいたかもしれないということを知っていたのがすごく印象に残りました。

また、赤十字の岩佐さんが震災の時に何が欲しかったかという話で、もっと情報があれ
ば良かったと言っていたのも印象的でした。自分達が普段生活してる時はスマホやテレ
ビ、パソコンなどいろんな情報収集手段、連絡手段があるけど震災の時はスマホは繋がら

ないし停電したらテレビもパソコンも使えないので、発電できるラジオを備えておくことがとても大事だと思いました。

3日目は涌谷高校と合同学習会、その後大川小学校を見に行き、震災で当時通っていた娘を亡くした方のお話を聞きました。

学校のすぐ裏には山があるのに、大きな地震が起きて津波が来た時の避難マニュアルが無かったばかりに川の方に逃げてしまって川から来た津波に多くの小学生が亡くなってしまった話を聞いて、自分たちも南海トラフ等大きな地震が起きた時に今の避難で大丈夫なのか、もっと考えないといけないと感じました。

四日市高等学校 2年 宮部 仙士

1月6日、三重県から福島県へ。郡山駅からの高速道路上に放射線量を示す看板を発見。当時の影響がまだ残っていることを、最初に実感した。最初の震災遺構請戸小学校では、ひん曲がった蛇口、窓のサッシ、めくれ上がった体育館の床をみて、津波の威力に圧倒された。

その後、原子力資料館で、福島県内の高校生と交流、バスで、東松島市内のホテルへ。

1月7日、午前は班の仲間と、あおい地区、佐藤和子さん宅で清掃ボランティア活動。震災当時の話、みなし仮設に入った話、現在の生活についての話を沢山聞くことができた。被災者本人から直接話を聞いたのは初めてだった。午後はあおい地区西集会所で2つの講義。1つ目は齋藤幸男さん、岩佐郁子さん二人が対話形式で行われた。齋藤先生からは、被災地での避難所運営を学校側の視点で、岩佐さんからは、赤十字看護学校の生徒たちが、厳しい状況の中で沢山の命を救ったことを聞いた。いずれのお話でも、災害時に高校生が果たせる役割は、思っていたよりも大きいと感じた。2つ目はあおい地区自治会長小野さんの講演。「日本一のまちづくり」を目指して行政と様々な競技をして作られた地区だとわかった。大事なものは、政治のやりやすさではなく、住みやすさなのだと改めて実感した。

1月8日。門脇小学校を視察。津波火災の被害の大きさと、迅速な避難の重要性を感じた。その後、県立涌谷高校の生徒と一緒にワークショップをした。防災意識が高い人が多く、良い刺激を受けた。その後は大川小学校へ行き、佐藤さんのお話を聞きながら遺構を見学した。今回の学習会で最も衝撃を受けたところだった。ここに限らず、一見は津波の被害を受け、多くの命がなくなった悲惨な場所と捉えがちだが、以前ごく普通の小学校だったこと、子どもたちが楽しく学び、遊んでいた場所だったと思うと、今の私の生活への見つめ方も変わってくるし、悲しい場所に一瞬で変えてしまう災害の恐ろしさを実感した。市役所の方から、あおい地区のまちづくりを行政の側からお話いただいた。また社会福祉協議会の方からも、災害ボランティアやボランティアセンターにおける高校生の果たせる役割などをお話いただいた。

1月9日、帰路。

1. この研修に参加した理由

私がこの研修に参加した理由は私の防災意識を高めるためです。私はこれまで、大きな災害を経験したことがなく、もし三重県で大きな災害が起こっても、どのように行動すればよいか分かりません。そこで、三重県で大きな被害が予想される南海トラフ地震に備えて、宮城県や福島県も被災地を訪問し、現地の高校生との交流を通じて、災害時の行動の仕方を学びたいと思ったからです。

2. 研修に行ってみて

私は今回の研修でたくさんのことを学びました。学んだことをいくつか紹介しようと思います。まずはじめに、災害に慣れることはとても危険であるということを知りました。これは、東松島のおおい地区に住むあんざいさんの話から学んだものです。あんざいさんは東日本大震災の震災直後、これまでの経験から自宅の二階にいれば津波にのまれることはないと思い、二階に避難していました。二階に避難していたところ、息子さんに「ここも津波にのまれる」と言われ、あんざいさんを外に連れ出し、山に避難させてくれたそうです。津波はあんざいさんの家をのみこみ、家があったところに家はなく瓦礫しか残ってなかったそうです。息子さんのおかげで命は助かったものの、地震に対して、先入観をもってはならないと思ったそうです。私たち住んでいる日本は世界的にみても地震が多い国です。みなさんは地震に慣れていませんか？よく聞く話ですが、海外の人と日本人では地震発生直後の危機感が日本人のほうがないそうです。これは、地震が起きた際などに日本人は正常性バイアスにかかりやすく、命の危機に鈍感であると言えます。そうならないために、避難訓練は毎回内容を変えるなど災害に慣れないような取り組みを学校に提案していこうと思いました。次に、東北大学非常勤講師の齊藤さんや東松島市社会福祉協議会事務長の千葉さんの話を聞いて、災害時、役に立つのは高校生をはじめとする子供だということを知りました。避難所などで大人の人に雑用を頼んでも断られたが、高校生や子供が避難所で頑張っている姿を見て、大人の方の気持ちが変わりもう一度頼んでみると雑用を受け入れてくれることがあったそうです。このことから私は、学校の友達にこのことを伝え、災害時避難所で手伝ってもらえるように今から備えていきたいです。最後に、災害発生前までの備え次第で今後災害が発生したとき、命が助かるかどうかが大きく左右するという事です。大川伝承会の語り部佐藤さんの話によると、大川小学校でたくさんの方が亡くなったのは、大川小学校の避難マニュアルが具体的でなかったことが原因の一つであるそうです。そのため、大川小学校の二の舞にならないよう学校の避難マニュアルを確認しておこうと思いました。

このように、私はこの研修でたくさんのことを学びました。今回の研修で学んだことを活かして今後、防災活動にいつそう取り組んでいきたいです。

1 日目・福島到着、震災遺構・原発資料館見学

今まで福島について知識として見る機会があったが、現地まで行くのは初めてだったので衝撃を受けたことがいくつかあった。1つは更地が多い景観に比べて新しい建物が多かったこと。もうひとつは言わずもがな震災遺構を見た時の衝撃であった。バス移動の時、平地が多くその平地が何に使われているわけでもなく、「ただあるだけ」という風景が長く続いていたことが印象深かった。そして、今まで聞いてきた震災についての知識と重ね合わせて様々な考えを膨らませた。(それが自分の勝手な想像かどうかは分からないが)

初めて見た震災遺構では、言い方が悪いかもしれないが驚きというよりも外の様子と相反してそこだけ荒れている様子を見て、良くも悪くも新しい刺激を受けた。震災については何回も聞いて来て恐ろしいものだということは頭では分かっていたはずだったが実際に見てみると映像で見るとよりも震災があったということを感じることが出来た。1日目の請戸小学校は全員が避難できたということだったが、本当に1分1秒でも遅かったらさらに被害があったかもしれない。そう考えると人と地域の繋がりと事前に災害について考えることは自分たちが思うよりも重要であり、もっと深めるべきことでもあると気付かされたと同時に、「その場にいたら自分は生きることへの希望を持てただろうか」という思いが出てしまった。そんな思いのまま原発資料館での話を聞いた。知識としての学びも勿論だが、現地の人たちの震災への姿勢が後ろ向きなものではなく、前向きなものがほとんどであったことが自分が請戸小学校で考えたことは考え方としてあまり良くなかったことに気がついた。「被災者だから」ではなく「復興するために」という考えが今までなかったものだった。復興へ繋げるための力というものが重要であり、その前のことは忘れてはいけない過去であるという向ける矢印を変えて前向きな姿勢でいることが復興の助けにもなることを知れた。

2 日目・高齢者住宅訪問、各講義

1日目と違いそれぞれ班があおい地区の高齢者住宅へ訪問したのでそれぞれの班が違う話を聞いたと思う。実際に被災した方々であったので当時の様子やどう避難したか、どのようなものが特徴的だったか、詳しく聞くことができた。1日目に地震と津波の恐ろしさを目にした上で話を聞いたのでイメージしやすかったが、当事者ではない自分にとってはどれだけ恐ろしいものだったか計り知れないものであった。震災当時の様子だけでなく、その後の生活など震災後何があったか、何をしたかなどの話も聞いた。その時に次の講義に繋がるあおい地区の仕組みについて教えて貰うい、どんな支援を受けどんな協力をしてきたのかを知ることができた。そのあおい地区の仕組みと協力について午後の講義で聞くことができたが、個人的には1番印象深い話であった。住民全体で作るまちづくりをそのまま実行していたということに衝撃を受けた。午前中に訪問したご夫婦が言っていた住宅への注文や棚の高さの調整なども恐らくその話し合いやフリーマーケットで決められたも

のだろうが、そんなことを住民全員のニーズに合わせてひとつずつ解決していくというのも大変なことである。しかし、それに加えて住民のための施設の建設、公園のコンセプトなど他に決めることも多くあったという。それらを何とか、行政とも連携をとり解決したということはやはり復興するための力強さというのが1番大きな理由であるだろうと感じた。自分たち一人一人が責任を持ち、一人一人がまちづくりをしていくという仕組みは今まであったようで実際に行っている所は少ないような印象がある。だからこそそれを体現しているあおい地区は評価され、住民の人たちも落ち着いた生活ができるのだろう。

3日目・震災遺構、涌谷高校との交流、講義

大川小学校での話は今まで聞いてきた震災遺構での話のなかで震災を1番身近に感じた。話を詳しく聞いたからかその当時の様子を想像でき、普通の生活が震災によってすぐに変えられる恐ろしさを知れた。涌谷高校での交流でも現地の高校の活動などを知れて、三重県でできていないこと、逆に三重県だからこそできることを考えられることが出来るとも思った。午後の講義でも、震災後のボランティアがどのような活動をしたのか、どのような工夫をしていたのか、自分たちが小さかったから知らなかったことを知ることができて今後にも役立てれると感じた。

津工業高等学校 2年 伊藤 秀

9:49 名古屋駅出発した。はじめて新幹線に乗った事もありとても興奮しました。

11:24 東京駅到着、三重とは違う何かを感じた。

12:55 郡山到着

15:00 高校生との交流で地震、津波の恐しさをあらためて、実感しました。1日目おわり。

2日目は、9:00~11:30 家のそうじをした。手のとどかない所は少し汚れていましたが、手の届く所はすごくキレイにそうじされていました。そうじをがんばったお礼に、わかめをもらいました。

13:00-16:00「こころのケア」しっかりとココロのケアができました。

3日目 9:00~9:45 門脇小学校を視察。

15:40~16:40「行政の災害対応と危機管理」の話を聞いた。

16:50~17:50「災害ボランティア活動」の話を聞いた。

4日目は、電車、バスに乗って終わり。

この4日間で学んだ事を身近な人に共有して、災害があった場合、冷静にかつすばやく行動していきたいと思います。

私は、冬休みの1月6日～1月9日の4日間、学校防災ボランティアに参加しました。宮城、福島に行き当時のお話を聞いたり、津波の被害を受けた場所を見学したり、地元の高校生と意見交換をしました。

1日目はまず、三重県から福島県に行き、請戸小学校を訪れました。初めて実物を見た東日本大震災関連の建物、目で見て津波の脅威を感じとても衝撃を受けました。

その後地元の高校生と交流した後、伝承館を周り、1日目を終えました。

2日目、朝から東松島市あおい地区に行き、ボランティア活動をしました。その後、ボランティア活動をさせていただいたお宅の方にも当時のお話を聞きました。あおい地区の方々とお食事をして、昼からは岩佐先生と齋藤先生のお話を聞き、避難所の様子や救護の状況がどうだったのかなどのお話をさせていただきました。

最後にあおい地区の会長の小野さんに被災後にどのように今まで復旧してきたのかをお話いただき、2日目が終了しました。

3日目、朝、バスに乗り、門脇小学校に視察に行きました。プレハブ住宅が見学出来たりしました。潰れた消防車がとても印象的でした。

つぎに宮城県涌谷高校で、地元の高校生と防災対策についての活動内容の交流などをしました。

お昼を食べて、大川小学校に行きました。大川小学校では当時そこで何があったのか、昔はどんな小学校だったのか、お話を聞きました。その後、行政についてのお話と災害ボランティアの受け入れにいてのお話を聞き、3日目が終わりました。

4日目、最終日は特に何事もなく三重に帰ってきました。

四日間、学び三重に帰ってきて、ずっと思っていたことがありました。それは学校の防災訓練を何もしていないことが気になっていました。先生に聞いてみると、新型コロナウイルスの関係でできてないとのこと。私は今回の学習をしてきて対策をしてもしきれないということがよく心に残ってることの一つだったので、自分の学校がどういう対策をしているかや避難経路などをまとめた資料を作成して全校の前で自分の経験を踏まえながら発表すべきと思いました。

今回は学校防災ボランティア事業で福島、宮城に行きました。今回の自分の目標は少しでも被災地の状況や、東日本大震災からどのように立ち直ったかなど自分の将来につなげたいと思い参加しました。

1日目は震災遺構請戸小学校、原子力災害伝承館を訪問しました。小学校は地震が起きた状態のまま保存されていました。木材がバラバラになり壁には津波のあとが残っていま

した。写真や動画では見たことがありましたが実際に見てみると、ほんとに壊れている所が多くて地震の大きさが分かりました。原子力災害伝承館では災害時の写真だったり双葉にある高校のことが知れました。震災から立ち直り、未来のことを考えていて心が強くてすごいと感じました。

2日目は災害公営住宅でのボランティア活動とたくさんの構話を聞かせていただきました。元々田んぼだった所を自分で建てて住んでいる方や二世帯住宅で住んでいる方などがいました。

講話では大震災が起きた時の詳しい状況や、何をすればよかったのかなど重要な話が聞けました。地震が起きると意外と大人の方が言い争っていて、高校生の方が冷静な判断ができていたと聞き驚きました。とっさに正しい判断をするのは難しいと思うけど、あせらないということが一番大事だと自分は思いました。

3日目は、門脇小学校・大川小学校の視察に行きました。特に大川小学校の方は記憶に残っています。避難場所が決められておらず津波が来ている方に逃げてしまい、約70の方が亡くなってしまったそうです。あらかじめ避難場所を決めておけばこのようにはならなかったと言っていました。避難場所、避難経路を決めておく大切さが分かりました。

今回のボランティア活動を通じて、地震が起きるまでの対策はもちろん起きた時、起きた後どうするべきなのか今回で新しいことをたくさん学ぶことができました。今後、南海トラフ地震はほぼ確実に起こると言われています。今回学んだことを伝えることで救える人が多くなると思います。いざ地震が起きたら冷静に判断して自分が1人でも多くの命を助けられるようになりたいです。

津工業高等学校 2年 安田 弦生

・1日目

郡山駅から請戸小学校に向かう途中で放射線計測器や除染作業の袋などが置かれてるのを発見した。放射線計測器は福島第一原発が起こった場所を中心に福島県の至る所にあるようだ。除染作業はかなり進んだもののまだ生身で入ることが難しいエリアもある。請戸小学校に到着。現地の高校生と顔合わせをし、学校内の見学をした。私はここで災害の脅威を初めて目の当たりにした。床や壁はもちろん、天井までポロポロになっている。小学校周辺には民家が沢山あったそうだ。今では小学校以外は更地になっていた。見学を終え災害伝承館に入った。ここでは館の資料を見て周り、現地のあさか開成高校と相馬高校の生徒と交流をした。あさか開成高校はクイズを出し楽しく学ばせてくれ、相馬高校は資料を元に話をしてくれた。

・2日目

この日は朝からあおい地区の方まで歩いて訪問した。午前中は10班に別れ、それぞれ別のお宅に訪問し家のお掃除をさせて頂いた。10時まで掃除をし、11時まで住民の方のお話を聞いた。私の訪問したお宅では老夫婦が地震はいつ来てもおかしくないこと、災害後の

ワークショップの事などを教えてくれた。お昼を食べ、少しの間あおい地区の方と談笑をし午後のカリキュラムに移る。午後の講話では災害時のこころケアの重要性。避難所に指定されていない場所での物資不足、正しい情報が回って来ない不安、避難所の設置と運営協力には子供の力が大きく役立つこと、災害後の復興と被災者支援などを実際の体験から語って頂いた。

・3日目

この日は朝からバスで門脇小学校に見学に行った。実際の証言を元に作ったビデオやグシャグシャになった消防車などを見て心底驚いた。次に涌谷高校の生徒とワークショップをした。これにより用意しておくものなどが自分の中で明確になった。涌谷高校の生徒とお昼を食べこの場を後にした。次に大川小学校にて語り部の佐藤氏のお話を聞きながら小学校を回った。ここでは災害時は一瞬の判断の遅れ、迷いが命取りになることを学んだ。もう一度あおい地区に戻り災害時に行政がした災害対策と危機管理についてお話を聞いた。住宅のことでかなり入居者と揉めたがお互いに歩み寄り見事、折衷案を見つけたそう。次に災害ボランティアについてお話を聞いた。災害時のボランティアセンターは社会福祉協議会(以後社協)が運営していることがほとんどである。しかしこれは必ずしも社協が運営を担うと決まった訳ではないそう。

・感想

私はこの3日間様々な被害を目の当たりにし、沢山の方のお話を聞いた。災害はいつ来るとも分からないし、分かったところでそれを阻止することは出来ない。だが対策は可能である。知恵をつけ、備蓄をし、家具を固定、避難ルートの確認など普段から出来ることを最大限し被害を少しでも抑えることが重要なのだと思った。

セントヨゼフ女子学園高等学校 1年 松本 和華

1日目

福島県の請戸小学校を訪問しました。津波で学校の壁のコンクリートが剥がれていたり、床などが大きくヒビが入っていたりと、改めて津波の恐ろしさが伝わりました。

福島県の高校生と交流した時「もう私たちは被災者では無い。復興し、普通の生活を送っている。その姿をぜひ見てほしい。」という言葉が心に響きました。東日本大震災当時私は5、6歳であり覚えていませでした。この事業に参加する前の私は、想像以上の津波が町中を襲い破壊し、沢山の命が失われた事、原発事故があった事の記憶しかなかったので、復興に向けて歩んでいる人達の姿を見てみるという考えはありませんでした。だからその言葉を聞き、被災地の捉え方が変わりました。

さらに震災から12年経った今でも『原発事故があったから農産物は危ない』という誤った考え方をしている人がいる事を知り、私達が「今でも厳重な検査しているから大丈夫。」と正しい情報を伝える事が重要だと思いました。

2 日目

東松島市あおい地区の仮設住宅を訪問しました。訪問先でボランティアをし、震災当時の話を聞きました。被災者同士が他の人の家に入って物を盗む行為もあったそうです。講話で聞いた「大人たちは経験していない事が起きると冷静さを失う。」まさにこのことだと思いました。人間は普段は正しく判断し行動出来るものですが、非日常では大切なことを見失ってしまい、判断を誤ったりしてしまうものだ学びました。

また、あおい地区では居住者が孤立しないように、地区で様々な取り組みがされていました。例えば、仲の良い人と近所に固まって住んだり

、高齢者や子育て世帯なども住みやすいように様々な工夫がされていました。今後、一人暮らしの人のサポートや自力で生活を立て直した人の見守り、心の復興の見守りを大切に活動していきたいとあおい地区の見守り隊の人達が話していました。

避難所運営については、石巻赤十字看護専門学校元教員のお話で、寒さ対策、トイレ問題、被災者の心のケア、感染症問題など、やるべき事が無限にあり、避難所運営がどれほど大変なものかもわかりました。そして、運営する側の人も被災者でありながら、避難者の対応に追われていたそうです。

3 日目

宮城県の大川小学校に訪問しました。語り部の話で、『守れるはずの命も守れない命になることはあってはならない』とありました。津波や火の中に飛び込んでまで助けて欲しいのではなく、ただそれ以前の行動を取って欲しいのです。という言葉聞き、心が苦しくなりました。先生も助ける為に必死だったはずですが、結果的に全員が亡くなってしまい、その時とるべき最善の方法が何なのかとても難しいと思いました。

百聞は一見にしかずという言葉がありますが、今まではテレビからの情報しかありませんでしたが今回実際、被災地を自分の目で見て、地震や津波の恐ろしさ、むごさを肌で感じる事が出来ました。とても多くのことを学ぶことができました。学んで終わりではなく、1人でも多くの人にこの学んだ事を伝えていきたいと考えています。

セントヨゼフ女子学園高等学校 1年 宮口 真緒

一日目

福島県の高校生との交流させていただいたとき、「福島県の農産物は放射能検査を厳密にしているにも関わらず、福島県の農産物を買わない人たちがたくさんいるので、もし、そのような人がいたら教えてあげてください」と言う言葉を聞いて、今も色々なことで苦しみを抱えた方々がいるのだと改めて感じました。

福島第一原発によって、たくさんの方々が家や学校、公園などの住み慣れた町を失いました。それは今も続いています。私は一番悲しいなと思ったことはその苦しみを理解されないことだと思います。「原発が起こったから、農産物は危ない」と勝手な先入観から物事を捉える人が約12年たった今でもいる現実を今後も重視すべきだと思うし、そういった考えをなくしていくことも私達の役目だと思いました。

二日目

あおい地区で、住宅を訪問し、訪問先の家で当時のお話を伺いました。お話をしてくださった方は当時、内陸の方にお買い物に行っていたそうです。そのときに津波が発生しましたが、内陸の方にいたため、津波の被害を受けなかったとおっしゃっていました。「私も、海沿いの方に行っていたら私はここにいません」と言う言葉が心に残りました。言葉にしづらいいけれど、心にとっても響いた言葉なので、みんなと共有したいと思いました。

三日目

大川小学校でのお話が心に残りました。「先生だって、子ども達を守りたかったに違いない」と言う言葉が悲しかったです。伝承館では現在も行方不明になっている当時小学4年の女の子のランドセルがありました。家族は今も色々なところを探しているのかなと考えると心が締め付けられそうです。災害が起こったらどうするべきなのかなのは実際に起こらないと大抵はわからないと思います。ですが、わかるところもあると思います。臨機応変に色々な場合を想定し、考えることが大切さだと感じました。

高田高等学校 1年 高堀 真央

「天災は忘れたころにやってくる」。これは、物理学者であり、随筆家であった寺田寅彦が唱えた言葉だ。日本は昔から災害が頻繁に起こってきた国であり、予想ができないものであるため寺田は、寸言として今に残しているのだと思う。

3月11日、多くの命が奪われた。誰一人として予想できなかったものであり予想したくなかったものだ。今回の研修で、実際に震災の被害を受けた土を踏み、人の話を聞いた。これは一生忘れないものであると思う、そして忘れてはいけない大切で重いものだ。出発の前夜、東日本大震災の津波の映像をYouTubeで調べた。そこには、一瞬にして黒い波にのまれていく建物や車をただただ見つめる人たちの姿だった。自然の猛威に対して私たち人間は無力なのかと悟った。津から長い時間をかけ、福島県郡山に降り立った。駅舎をでるとすぐに放射線測定器が立っていた。改めて福島にきたと実感した。海から300m程のところにある請戸小学校に向かった。校舎の1階は大地震と大津波の脅威を物語っていた。請戸小学校が位置する請戸地区は、津波による死者が127名、行方不明者が27名と多くの犠牲者を出した地区である。請戸小学校の児童と教員は、約1.5km離れた大平山を目指し逃げ助かったといえます。東日本大震災・原子力伝承記念館では、原子力事故によって奪われた人の生活や東日本大震災の被害の記録や記憶が展示されていました。人の命だけでなく、生活も奪った東日本大震災は風化させてはなりません。この研修を通して、天災だからといって何もしないのではなく常に自分とその周りの人を守るためにどう行動すべきなのかを私たちは考えなければならぬと思いました。今回訪れた大川小学校も先生の判断で多くの子どもたちが命を落としました。これは、天災ではなく人災だと思います。これから南海トラフ大地震が来ると言われる三重県に住んでいる1人とし

て人災で終わらすのではなく、君がいたからこの地域が救われたと言われるくらいになっていきたいと思います。

高田高等学校 1年 治田 優花

今回の学校防災ボランティアに参加する前までは、災害について、あまり恐怖を感じておらず、起こっても「なんとかなるだろう」と簡単に考えていました。それは命に危険を感じるような災害体験をしていなかったことと、災害が起こらないうちに自分の人生は終わるだろうという甘えた考えがあったことが主な理由なのだと思います。

しかし、福島、宮城と3泊4日で災害について見聞を深め、実際に被害にあった町や学校を訪れたり、自分の大切な人を、災害によって奪われてしまった人々や、震災を体験した方々のお話を面と向かって聞いたりすると、「なんとかなるだろう」とは思えなくなりました。請戸小学校で初めて震災跡を見た時に、時を越えて私の胸に迫ってくるものがありました。もし私や友人が請小の小学生で、逃げる時にみんなとはぐれてしまったら、または大平山の存在に気付けなかったらと考えると、私はきっと助からないだろうと思います。人はパニックになると、何もできなくなってしまうのです。それは、大川小学校でのお話でも感じたことです。

そのように、リアルに想像できたことが一番の収穫だったのではないかと考えます。もちろん、災害を受けた後の対処や暮らしを学べたのも大切なことではありますが、まずは想像によって防災について、無関心ではなくなったことが大きな変化ではないでしょうか。

小野さんのお話で、子供や中高生にできることを教えていただきました。子供たちと遊んであげること、大人が荷物を運んだり、掃除をしたりするのを助ける、歌やダンス、挨拶や会話によって、人々の心を癒やすことなど、大人と子供の狭間にいる私たちだからこそできることがあると、おっしゃいました。災害直後に私たちにできることは、私が想像していたよりも多様で、たくさんありました。

友人の平井さんと話し合っただけですが、私たちは、これらの経験をクラスで発表して、少しでも多くの人に、防災について関心をもってもらえるように活動していこうと考えています。これからもっと防災について調べ、発表していけたらと思います。

高田高等学校 1年 平井 里佳

現地に行く途中、震災によって壊された建物をたくさん見た。しかし、地域の人々だけでなく、県外からのボランティアも復興に協力し、少しずつ建物が増えてきている。想像よりはるかに高い津波が襲ったことに衝撃を受けた。現地の高校生との交流では、自分は

まだまだ震災について知らないことが多いと感じた。もし、これから災害が起こった時には、被災地の援助やメッセージを送り、少しでも力になろうと思った。2日目に仮設住宅にお住まいの方のお話を伺ったとき、自分たち次世代が、その次の世代の人々にも伝えることが大切だと思った。避難所でのサポートとして、このご時世ではより一層、衛生環境に気をつけることは必要不可欠だと思った。また、情報がわからないと、津波の実感・意識がないので、注意をしたい。

私たち高校生は、立場を中心に考える大人と違って、役割で考えて行動するので、避難所では力が必要だと思った。大川小学校を視察した際には、津波の来る一分前に避難し始めたことを知り、直前だけの準備では、手遅れだと思った。深く考えることから逃げずに、しっかりと「災害」に向き合って想定しておくことを意識したい。私が特に印象に残った活動は、「会話と対話の違い」についてのセッションだ。相手と何気ない会話を繰り返すことで、対話ができるような関係になると考えた。会話をすることで、信頼関係を築くことができるので、震災時には大切なことだと思った。そして、これらの活動を伝えたいと思い、クラスで得た情報や感じたことを発表しようと思った。いつ災害が起こるかはわからないということを知り、その危険性を伝えるのは、現地で話を聞いた私たちだと考えた。私たちは、災害の意識を高めなければならないことを、身近な人に伝えたい。震災を経験したことのない私にとって、今回のボランティア活動は、とても良い体験になった。

松阪高等学校 2年 山本 楓莉

私は30年以内に7割以上の確率で起こるとされる南海トラフ巨大地震の際、三重の高校生として自分にできることを増やしたいと思い、この事業に参加しました。

今回の事業では、三重の高校生34名と引率の方13名で福島県と宮城県に訪問しました。活動する4日間で3つの震災遺構と伝承館の視察、災害公営住宅でのボランティア活動と講話、現地の高校生との交流等を行いました。

まず初日に、あさか開成高校の校長先生が「大変だったね、ではなく東北が立ち直っている姿を見て欲しい」と仰ったときに私の中でこの活動における1つの指標が出来ました。震災から12年が経とうとしている今、私たちが見るべきものは震災や津波の悲惨さだけでなく、福島県や宮城県をはじめとした被災地がどのように復興し、どんな新しい生活を築き上げてきたのかという、東日本大震災当時から見た未来の部分なのだと感じました。また、2日目に訪問したあおい地区は1から新しいまちを作り上げて出来た集団移転地区であり、そこで住民の方々と交流する中で復興して出来上がった未来というものを体感しました。

そして3日目に視察した大川小学校では、語り部の佐藤さんに当時大川小学校では何が起こったのかお話を頂きました。そこで私が学んだことは、事前準備の重要性です。その場の判断が生死を分ける災害発生時は誰もが冷静ではられません。そのため、普段からマニュアルを用意し、訓練を行って初めてすぐに避難を開始することができるのだと改め

て思いました。救えたはずなのに失ってしまった命をこれ以上増やさないためには、日頃の備えの存在がとても大きいことに気付きました。

この活動を通して学んだ、防災において重要な事前の用意や災害についての情報を広め、地域の方々とコミュニケーションをとることで、地域に貢献していきたいと思えます。

昴学園高等学校 2年 西野 もも

3日間の活動を終えて、実際に足を運ぶことの必要性を感じた。やはり、話を聞かすだけ、ネットで調べるだけでは伝わらない事のほうが多い。私はこれまで分かっている気になっていただけだったと痛感した。

1日目に訪れた、請戸小学校。1階は、教室であったとは思えないほどに崩壊しており衝撃的であった。教室の後ろにあった黒板に「がんばれ！」という言葉がいくつも書いてあり、思わず写真を撮った。移動中にバスの外は放射能が三重県の7倍近くあると聞き、母が心配していた理由がこのためであったことに気づいた。12年たった今でも、容易に立ち入れない場所があるのかと思うと辛い。

2日目に被災者のお宅に伺った。その方は涙ながらに当時の話をしてくださった。お話の中で一番印象に残っているのは、1ヵ月お風呂に入れなかったという話だ。入れるようになってからも、時間が分きざみで決められているため十分な入浴は長い間できなかったという。当たり前がどれほど恵まれているかがよく分かった。講話では講師の方がおっしゃっていた「情報」というワードが印象深い。意外であったからである。しかし、情報がなくては身動きがとれないというような話を聞いてとても納得した。

3日目に視察した大川小学校。私自身、学校で何度か、大川小学校で起こったことや当時のニュース映像を授業で用いられてきたため、大川小学校の存在は知っていたし、起きた事も把握していた。しかし、語り部の方からの言葉は重みが違い、1つ1つの説明が胸に突き刺さった。「守ってほしかった命は簡単に守ることができた命」この言葉が忘れられない。

3月11日のあの日、みな何が正解なのかも分からないまま、ただひたすらに生きようとした。3日間の間この事実が毎日、痛い程伝わった。振り返ると、被災者の方に聞く事ができなかった事、発言できなかった瞬間、もう少し動けたタイミング。反省する点は沢山ある。しかし、学んだ事、新しく知れた事も同じくらい沢山あった。

さて、これら学びをどう生かそう。そう考えても私達学生にできる事は限られているのかもしれない。

私は避難時の話を聞く上で日頃の地域とのつながりが必要になると感じた。事後学習では、そこにスポットを当てて考えを深めていきたい。

私は今回の防災ボランティア活動で普段では聞くことも出来ないような貴重な体験を知ることが出来ました。その中で印象に残った話や考えを一つずつまとめます。

1月6日、新感線で福島まで移動して津波の被害を受けた学校である場所を訪れた。

新幹線に降りてすぐは周りの建物も大きく沢山の店があつてにぎやかだったけど、バスに乗って目的地へ向かっていくと、段々と静かで何も無いような場所に壊された学校が一つ建てられていた。

そこに着くと、職員さんが居てその津波が来る前の状態や来た時あった出来事を詳しく話してくれました本当にあったのかと疑問に思うくらいに学校は崩れていて実物を見た時は驚いてました。

そして、その話によると避難する時に一人の子供が先生達に『こっちへ逃げよう！』と導いて山を登って津波を回避していたそうです。

もしその子が言ってなかったらと考えると、一人一人の判断が大切なんだなと感じました。

次に、『東日本大震災・原子力災害伝承館』へ見学しに行きました。そこには災害地に落ちてあった物が沢山展示されていて、その時の出来事をCGなどを使って分かりやすいように表現してあり、実際の写真や映像を見ることも出来ました。

どのくらいの規模なのか、苦しいことも知って自分にもその苦しさが伝わるくらい感じました。

1月7日、『あおい地区』という場所へ向かいました。着いたらまずボランティア活動として高齢者で一人暮らしをしている方の家に訪問しました。そこでは台所周りの清掃をしてから、高齢者の方に大震災の頃の体験談を聞きました。その時にどうすれば良かったか、どのような事を備えておけば良かったか色々な事を質問出来てとても良い体験になりました。人の為に行動も出来て気持ちも良かったです。

次に、集会所へ行き地区の役員さんの話を聞いたり、グループ行動をする『対話』をしました。

私が特に印象に残った話は、大人と子供の考え方の違いというものでした。集団で目標に向けて大人は縦割り行政というリーダー、副リーダーと立場を作って対応をするやり方

が多いのですが、一方子供は、上下の立場を作るのではなく一人一人に役割を付けて蜘蛛の巣のように他の役割と繋げるやり方がほとんどでした。

大人の考え方は、トラブルが起きた時には安定感があります。ですが対処するまでに上に報告してそこで上の者達が会議をしてどうするか決めて下へ伝えるという長い時間を使います。それに対して、子供の考え方はトラブルが起きても他の役割が対処しに向かいすぐに終わらせることが出来ます。スピード感がとても違うのです

大人の考え方では安定感がありますがスピードはあまり早くなかったです。だからトラブルの対処も遅れやすい。子供の考え方であった役割分担も考え方のとして取り入れ丁度良いバランスを取るのが良い、そうすれば何があっても心配せず落ち着いて対処出来ると思いました。

1月8日、私は大川学校へ行きそこであった出来事を聞きました。そこではかつて小さな子供が大きな広場で運動をして遊んでいたり楽しく授業を受けていたらしいですが、災害によってほとんどが崩壊してました。近くに山があったから避難をすればいいと学生達は逃げようとする、先生に止められて集団で避難しろと言われてたらしいです。

その結果避難の途中で行き止まって生き残った人は居なかったです。

この事を聞いて、日頃から何が起こっても大丈夫なように考えておくべきだと思いました。

宇治山田高等学校 2年 二見 新汰

今回、自分は初めてボランティア活動というものを、明確な目的を持っていきました。初日、ほとんどが移動の中、動画を見ました。その動画の中には、いまだに家に帰ることができていない、当時の思い出の方が少ない、といった僕らと同年代の方々が多くいました。「あ、あれ私の下駄箱だ!」、「あそこでけん玉してた!」という話をしている方もいました。自分は、そういう経験がなく、皆さんの表情がいく前といく後で、明確に違うことがわかりました。行く前はなんというか、少し硬い表情だったのが、終わった後は少し達成感があるような、でも少ししこりがあるような、そんな表情に見えました。

電車から降りてすぐ、駅に放射能検査機がありました。初めて見たのですが、人がいる場所でも前の何倍も放射濃度が高く、本当に大丈夫なのかともありました。その後の講話で、同世代の高校生に話を聞き、クイズや新聞など、興味を惹かれるような話をさせていただきました。現在でも食品には、放射能検査をしているそうです。今までそんなに気にしていなかったが、そんな過程を経て自分たちのところに届くのか、と知れまし

た。「当時は被災者だったが、現在は違う」という言葉がこの東北で一番頭に残っています。復興と復旧の違いも自分は知らなかったので、この機会に知れてよかったです。

2日目は、少しボランティアで掃除をした後、講話を聞かせていただきました。当時の状況からどうやって建て直したのか、またそこからどうやって街を復興したのか、そして当時の緊迫した医療についても語られていました。自分はガレキと聞くと、ゴミと考えていましたが、当時はそれがリサイクルされたり、それが仕事になったりと、役に立たないどころか、自分たちの生命線だったということに、かなりの衝撃を受けました。今までの自分と考えが大きく変わりました。また、ボランティアの掃除で伺った方は、息子の奥さんを亡くしていると言っていました。が、当時は本当に悲しみに満ちていたが、現在は新しい友人もできて幸せだとおっしゃっていました。

3日目、色々な被災地を周り、当時小学生だった娘を亡くした方から、過去から学び、これから繋がるという話を聞き、自分の家族、学校はちゃんとできているか、本当にみんなが助かるのか、ということが浮かびました。また、天井まで届いた泥には、津波の脅威と、恐怖が伝わりました。

自分は今回の経験を通して、命の重みに加え、それを乗り越えた方々の努力を生で聞き、知ることができました。学校でも友人や先生に、家族にもこの話をたくさんしました。このことを、自分だけでなく、これからもっと周りにつたえて、震災で二度と大切なものが失われないようにしたいです。

宇治山田高等学校 2年 丸山 真之介

このボランティアに参加するにあたり、僕は2つの目標を掲げました。

一つは、今自分が知っている東日本大震災の知識は本当に正しいのかを自分の体全体で確かめる。

二つ目は、この活動を通して県内外の高校生徒の交流を深めることです。

実際に現地へ訪れて、僕の知識と同じこともあったが、知らなかったことばかりで、例えばニュースとかでも津波がクローズアップされて、実はその後の避難生活の方が辛かったり、避難者ではなく避難者を迎え入れる側の方の目線の話をお聞きしたりと、普段学校で勉強しているだけでは絶対にわからないことを体験できました。

その中でも一番心に残っているのが、活動を通して東北の方全員が明るく話して下さったことです。

正直、僕は最初暗く悲しい気持ちで伝承館に入りました。そこで福島の高校生が明るく出迎えてくれたり、荒先生の言葉にあったように「もう私たちは被災者ではない」という前向きな気持ちに僕が背中をおされました。

その後の活動で大川小学校の校歌である「未来をひらく」や語り部の方の言葉にあった「ここは悲しい場所ではなく、未来を拓くところ」という言葉に心を動かされました。

高校生との交流は、初めは慣れなかったけど、気がつけば一つのクラスみたいに親近感がわいて、もっともっとこのメンバーで活動したいなと感じました。

この活動を通して本当に防災への意識が百八十度変わりました。防災はハッピーエンドで終わらせることを常に思いつづけていきます。

「いつまでも下を向いてはいけない、前を向いて進まないといけない」と現地そして現地の人たちが教えてくれたので、僕も、まず行動に移すことを大切にして、何事も前向きに全力で取り組んでいきます。

伊勢まなび高等学校 3年 池山 愛理

1 日目

郡山駅に着くとソーラーパネルのついた、数字が表示されている機械があった。

この機械は「環境放射線測定器」と言うらしく、福島県でバスに乗っている最中も何度か見かけました。

☆震災避難請戸小学校

校舎の視察を行いました。

校舎を回ると所々に「津波浸水深ここまで」と書かれた看板が数個設置されていた。

校舎は壁や天井の外壁が大破しており、特に印象に残ったのは体育館でした。

床が大きく陥没していました。

小学校の2階は展示室になっていて、色々な資料がありました。

☆東日本大震災 原子力伝承館と現地高校生との交流

資料館につくと福島県を襲った地震、津波の災害の様子を撮った映像を見せてもらいました。

2階には展示品、写真が沢山ありました。

現地の高校生との交流では色々なことを学びました。

2 日目

☆東松島市あおい地区ボランティア交流

あおい地区でのボランティア交流として、現地の方の家を訪問しました。

私が訪問したのは猫と暮らすご高齢の方の家でした。

掃除の行き届いてない所を掃除させてもらいました。

その後、あおい地区の役員の方を交えて、お話を聞かせていただきました。

その後、あおい地区役員の方と昼食を食べました。

☆講話では「災害医療とこころのケア」で石巻看護専門学校のお話、「避難所の設置と運営協力」、「復旧、復興の被害者支援」の話を聴きました。

3 日目

☆門脇小学校

3 日目のはじめに、石巻市門脇小学校の視察を行いました。

東日本大震災が起きた時のお話を説明していただいたあと、学校内の見学を行いました。

☆宮城県涌谷高校生徒との防災合同学習

涌谷高校生徒との交流では、涌谷の生徒さんを交えたグループが生まれ、お互いに災害時についての意見交換をしました。

お互いの県の防災についての話もしました。

☆大川小学校

大川小学校の視察では語り部の方にお話を聞かせていただきました。

近くに山があり、実際に登りました。

☆あおい地区集会所

「行政の災害対策と危機管理」、「災害ボランティア活動」の講和ではまちづくりの話などを聞かせていただきました。

伊勢まなび高等学校 2年 山口 冬人

私が今回この三重県の学校防災ボランティア事業で学んだことや感じたことを今か書いてく

まず初日の高速で路面状態を見てあコレ震災の時にヒビ入ってアスファルト引き直したんかなあと思ったその後いわき市を抜けてトイレ休憩で降りた PA で放射能測定機があってあ福島原発の辺りに近づくんだなあと考えたそして高速降りて鬼頭先生のマイク放送とスクリーニング場の案内看板また交差点があるのにフェンスで閉じ込められているのを見て

ああ あの震災から復興はしているけどこの土地はまだ放射能と闘っているんだなと思ったその後請戸小学校にむけて進んでいる最中に建物が全く見つからなくてああここにあった建物は津波で全て無くなったんだなあと考えて少し寒気がした請戸小学校の説明を見ていて逃げるって考えとその場で安全に逃げるための機転がきいたのが素直にすごいなと思った

2 日目の朝あおい地区でのボランティア活動の時にあやっぱりこの地区は行政が効率的に作った地域なんだなあっていう町の作り方だと思った

でも地区会長さんのお話で効率的にでもニーズに応えるようにやったんだなあと考えた

3 日目の門脇小学校に行って焼けた後とか流された車を見て津波ってとても怖いなあって思ったその後ビデオ聞いている時に思ったのは先ずは逃げるってのとあるもので最善を尽くせっていうのを思った(前日の看護学生のはなしも聞いてて)

そのあと小学校の見学をして思ったのはよく生き延びれたなあとと思った
その後大川小学校に行って最初に着いた時にここもやっぱり津波で全てが流れたんだな
と思っていたら語り部の方が見学に来た人がなんでこんな何も無いところに小学校があるん
ですかって質問したって聞いて僕はなぜそんな質問が出たんだろうと恐ろしくなった
そしてこの被害が大きくなったのはマニュアルがなかったっていう最後の方に言った言
葉を聞いてその通りだなって思った

簡潔にまとめられたつもりも書きたいことを全てかけたつもりもないがこれで報告書を示
させてもらう

名張高等学校 2年 秋田 真穂

私は防災について学ぶために実際に大規模な地震のあった東北地方の福島、宮城に行かせて
頂きました。まず向かったのが福島県の請戸小学校でした。請戸小学校は津波の被害を
受けて1階が完全に浸水してしまったということで実際に現場を見て恐怖をおぼえまし
た。また、悲しさも感じました。その後福島の高校生とも交流し、お互いの県の防災につ
いてしれたかなと思いました。宮城のあおい地区ではまず災害公営住宅に行かせていただ
いて、お話を聞くと大きな蔵が流されたとおっしゃっていて津波の威力はやはりすごいな
のだなと思いました。また、個人的に思ったことが被災されて最初は辛かったと思いま
す。ですが現在は自分達の体験を知らない人に伝えるというのに変わってきていると思
いました。もちろん、辛い体験なので語りたくないという方もいると思いますが、被災体験
を語っていただけるのはありがたいことだと思いました。次に災害医療のお話と避難所運
営と復旧・復興についてのお話を聞かれました。まず災害医療についてですが
津波によって塩水と泥がつくと乾かなくなり低体温症になるということがわかり以外にも
低体温症で亡くなる方が多かったということで驚きました。また低体温症の他に打撲、裂
傷、破傷風などになり不衛生な状態になってしまうということがわかり医療について大変
だと思いました。そして当時あったらよかったのはなんですかと質問させていただいた
ときに情報とお答えいただきとても驚きました。たしかに正しい情報、情報交換などは大切
だと思いました。避難所運営に関しては大人たちの冷静さが欠けてしまっていたのでこう
ゆうときこそ冷静さが必要だと思いました。大川小学校ではたくさん子どもたちが亡く
なって、とても悲しい気持ちになりました。また、実際にお子さんを亡くされてとても悲
しく、悔しい思いをされているはずなのに自分達に語っていただいて本当にありがたか
つたです。この活動を通してとても成長できましたし、視野が広がってよかったです。

①ボランティア活動への動機

私は、今生活している地域が誰にとっても住みやすく、安心して暮らし働ける魅力あるまちであってほしいと思い、様々な課外活動を通して「まちづくり」に取り組んでいます。この事業に参加し、防災に関する正しい知識を深め、その学習を地域で活かすことが出来れば、まちの安心に繋がるのではないかと思い参加しました。

②活動を通して学んだこと私たちが行うべきこと

この活動に参加し、特に印象に残ったのは大川小学校の見学に行ったことです。ここは、児童・職員の多くの方々が津波で亡くなった所です。津波が到達するまでに50分もの時間があり、十分に助かる命・助けられる命があったにも関わらず助けられなかったという悲劇になってしまいました。映像ではなくありのまま残された建物や語り部の方からのお話を見聞きしたことで、津波のもたらした被害の大きさや恐ろしさに胸がいっぱいになりました。そして、語り部の方は、地震に対し、いざという時の備えを学校や家庭・地域全体で取り組むことが「命を守る」最善であり「ここは未来を拓く場所です。」と言うこともおっしゃっていたのが今も心に残ります。単なる「津波被害があった場所」で終わるのではなく、この言葉のように、今を生きる私たちが、今後、悲劇を繰り返さないよう、教訓を活かしていかなければならないと感じました。

大川小学校のすぐ近くには小さい子供でも登れる山がありました。これまで、津波が到達した記録がなく小学校がいざという時の住民の避難所と認識されていたため、大津波時にはこの場所が危険であるという意識が薄かったこと、避難マニュアルがあったにも関わらず具体性に欠けていたことからうまくマニュアルを活用できず、逃げる場所・手段があったにもかかわらず命を失ってしまったという話を聞きました。もし、具体性のあるマニュアルや危険に対する意識があれば助かっていたのかもしれないと考え、日ごろから災害の意識を持ち、色々なパターンの備えを考えておくこと、また、その備えに対し、見直し続けていくことが大切であると思いました。

③今後に向けて

活動を通し、現地に足を運ばせてもらい、改めて災害の爪痕と悲しみの深さに心が痛みました。また、地元の方と交流を通じ、復興に向かって前に進む気持ちに触れ、改めてこの震災を風化させてはならないという想いと「命を守る行動の大切さ」、「自分の命は自分で守る」を私なりに、友達や家族・地域の人たちにしっかりと伝えていきたいと思います。

1 この事業に参加するにあたって

私は昨年度、この研修に参加し、大川小学校や門脇小学校を視察したり、被災された方の体験談をお聴きしたり、他県の高校生と交流したりする機会を得た。そこで研修後、参加メンバーと協力して、「震災で悲しみを抱える人を作らない地域」を目指し、津波避難場所への案内板設置を目指す「防災きにゃんプロジェクト」を立ち上げた。現在、その資金のために、非常持出袋の開発を行っている。今回の研修では、被災時に必要になった物などをお聴きし、この活動に活かしていきたいと考えた。

2 若い世代の存在の大きさ

私は、今回の研修で、宮城県石巻西高等学校元校長の齋藤幸男先生のお話が印象に残っている。齋藤先生のお話は昨年度のこの事業や紀南高等学校でのご講演などで、何度かお聴きしている。その中で繰り返しおっしゃっているのが、「想定外のことが発生した場合、大人の方は柔軟に動けないことが多い」ということである。講演では、災害発生後に大人の人たちが混乱している様子を動画で視聴した。大人は豊かな人生経験がある分、未経験のことには対応が難しいという。一方、若い世代は経験年数が短い分、経験値に縛られず柔軟な発想ができるそうだ。東日本大震災の避難所運営において、高校生の前向きな言動が多く課題やトラブルを解決した事例をお聴きした。高校生の挨拶や言葉かけが被災された方の心を和らげたり、支援物資は優先順位の高いものから入り口近くに置くということを提案したりするなど、高校生の存在は大きかったという。避難所運営をスムーズに行うためには、私たち高校生を始めとした若い世代の行動力と柔軟な発想が大切であることを、強く心に刻んでおきたいと思う。

また、東松山市の災害公営住宅あおい地区会・会長の小野竹一さんのお話も印象的だった。東日本大震災から11年が経ち、被災地の復旧・復興の様子を、私たちがニュースなどで知ることは本当に少なくなった。だからこそ、小野さんは、被災地の復旧・復興のことを忘れないで欲しいと訴えていた。1時間余りの講演だったが、今回私たちが家事ボランティアを行った災害公営住宅が整備されるまでの道のりは、たった1時間では語り尽くせない大変なものだったろう。最後に、「被災地の方々はどうなにか辛いときでも、決して笑顔が枯れることはなかった」とおっしゃっている小野さんの笑顔を、私は忘れられない。

3 防災・減災のリーダーとして

私は、幸運にも今年度もこの事業に参加することができ、貴重な体験を2回もさせていただいた。最初にも書いたが、昨年度のこの事業の参加メンバーを中心に、私たちは津波避難場所への案内板設置を目指す「防災きにゃんプロジェクト」を立ち上げて活動している。資金不足のため、設置までの道のりはまだ遠いが、今後は非常持出袋の開発・販売を加速させ、その収益を看板設置資金に充てる予定である。

また、本校から新たに参加した1年生の後輩たちにもこのプロジェクトに参加してもらい、もっと大きくしていった欲しい思いもある。しかし、彼女たちが新たに立ち上げようとしているプロジェクトがあるのであれば、そちらもサポートできたらと思っている。今後は、この事業に参加したメンバーが中心になって、地震や津波の恐ろしさだけでなく、身近な方を失った辛さや命の大切さを多くの人に伝えるとともに、教訓を地域の防災・減災に役立てていきたいと強く思う。

紀南高等学校 1年 亀石 沙來

1 この事業に参加するにあたって

私は将来、看護師になりたいと思っている。特に、この地域の災害医療に携わりたいと思っている。この研修では、震災時に赤十字看護専門学校で働いていた講師の方を始め、東日本大震災を体験した方から貴重な体験を聴くことができると思い参加した。可能な限り災害時医療についての理解を深め、このことを三重県での災害医療に生かして活動したい。

2 災害公営住宅でのボランティアをとおして考えたこと

研修2日目、私たちは東松島市あおい地区の災害公営住宅でボランティアを行った。主に、一人暮らしの高齢者宅で、高齢者の方とコミュニケーションをとりながら、キッチンの水回りやガスコンロの掃除を行った。私は、担当した高齢者の方から、その方が体験した震災当時のお話を聴かせていただいた。その方は、「人と人との繋がり」という言葉をキーワードとして語っていた。普段から、人と人との繋がりを大切にしていると、災害時にお互いに助け合いができる、つまり共助につながるというのだ。

また、震災時の医療の現状についても教えていただいた。その方によると、医療班は、何週間か経ってから、自衛隊と一緒に支援に来たという。私は、何もできないまま数週間を過ごしていたという事実を知って、とても驚いた。医療班が到着するまでの間、怪我や感染症などの傷病だけでなく、持病を抱える方や心に不安を抱えている方への対応はどうなるのだろうと、想像するだけで怖くなる。避難所に医療従事者が一人でもいれば心強いが、災害直後はそうでない場合の方が多いことを考えると、医療班が到着するまで、被災された方の健康や安心・安全を守るのは自分たち、つまり共助の気持ちなのではないかと考えた。

3 共助の気持ちを高めるには

この研修で、私は共助の大切さを改めて知った。今後、この研修の講話や被災者の方の体験談を家族や友人を始め、多くの方に伝えるにあたっては、特に共助の大切さを強調したいと思う。また、私が住む地域で、共助の気持ちを増やすためにはどうすればよいのか考えてみた。それには、人と人の接する機会を増やすことが大切だと思う。例えば、宮城県涌谷高等学校で行ったワークショップのように、災害が発生すると想定してのシミュ

レーションを行うことで、いざというときに自然と助け合いができるだろう。この地域でも、高校生から高齢者までが集まって、ワークショップを行う機会を提案できればと思う。

また、防災避難グッズを準備したり、AEDを使った心肺蘇生法心肺蘇生法やや止血止血、搬送搬送の方法といったの方法といった応急手当応急手当をを学んだりして、もしも学んだりして、もしものときのために個人の防災意識を高めたり、技術を身に付けたりすることも必要になってくると思う。今後、南海トラフ地震が発生してもスムーズに対応できるように、学校の防災の授業などで講義を聴くだけでなく、今から積極的に行動して準備をしていきたい。

紀南高等学校 1年 田中 絆愛

1 この事業に参加するにあたって

私は、病気や怪我で苦しんでいる患者の方の不安に、しっかり向き合える看護師になり、災害時に地域のために力を発揮したいと思っている。そのため、この研修では、災害が起こったときの支援の在り方や心のケアなど、災害時の健康や安心・安全に関すること、そして被災された方とのコミュニケーションなどに関する知識や技術を学んでいきたい。また、福島県・宮城県の高中生との交流をとおして、より進んだ考え方や感じ方を学んでいきたいとも思った。

2 もしものときに備えて

私が印象に残ったことは、石巻市立大川小学校で、当時小学6年生の娘さんを津波で亡くされた語り部・佐藤敏郎さんから聴いたお話である。大川小学校では、多くの児童・教員が津波で亡くなった。私は、大川小学校で起きた出来事について、事前学習で学んで知っているつもりだった。しかし、二階の天井まで津波が来てボロボロになった建物や、横倒しになったコンクリートの渡り廊下の様子は、想像をはるかに越えるもので、私は衝撃を受けた。そして、佐藤さんのお話を聴いて、ただ「可哀想、悲惨、悲しい」という感情を抱くだけではなく、このような津波避難のミスという過ちを繰り返さないように、私は何をすべきか、何を伝えていくべきかを考えなければならないと強く思った。例えば、震災が起こった時の避難マニュアルは適切か、避難場所に繋がる道は通行可能か、道が狭かったり、ブロック塀などが倒れたりして避難の障害になることはないか、避難場所が使用できなくなったとき、次の避難場所は決まっているかなどを常に点検し、改善していくことが大切だと思った。

私には、もうひとつ印象に残ったことがある。それは、石巻赤十字看護専門学校元教員の岩佐郁子さんのお話だ。私は、災害時に最も必要なものは水や食糧、医療品だと思っていた。しかし、震災時、物資がないことと同じように、「情報がないことに困った」というお話を聴いた。情報がないことで、現状を把握できなかつたり、今後の見通しが立たなかつたりすることが不安だったとおっしゃっていた。

3 身近なことから点検を

今回の研修では、実際に震災を経験した方からのお話を聴くことで、命を守るにはどうしたらいいのか、適切な判断・行動をとるにはどうしたらいいのか、ということを考えるきっかけをいただいた。だからこそ、南海トラフ地震で犠牲者を出さないように、まずは避難場所へのルート確認をするべきだと思った。もしも津波が発生したら、一刻も早く1メートルでも高い場所に逃げられるように対応しなければならない。

私は、紀南高等学校の避難マニュアルは大丈夫なのかと少し心配になった。津波避難場所として浅間山が指定されているが、そこに向かう道は狭く、一方が崖になっている。もし、崖崩れなどでその避難場所が使用できない場合、次の避難場所が指定されているのだろうか。もし指定されているとしても、私たちはそこに行ったことがない。もしできるなら、大川小学校の教訓を生かし、次々に変化する状況に対応できるように、紀南高等学校の避難マニュアルを点検し、私たちで改善していきたいと思っている。

紀南高等学校 1年 檜作 和香

1 この事業に参加するにあたって

私は、家族や地域の方々が震災で悲しみを抱えることがないよう、高校生の立場で何ができるのか、特に、興味のある建築分野のことについて多くを学びたいと思った。そして、その知識を生かし、建物の耐震化や道路の補強、また震災後の避難所生活が満足なものになるよう、避難所の居住性を高めるために何ができるのかを考えたいと思った。

2 今後の行動目標としての教訓

私は、今回の研修で、齋藤幸男先生がおっしゃった「大人が持っている経験を聞いて知ることも大切だが、自分たちで考えたり調べたりして新しいことを知っていくことも大切」という言葉が特に印象に残っている。大人の方は、私たちに比べて多くの知識や経験があるので、常に適切な判断や行動ができると思っていた。しかし、想定外の事態に遭遇したとき、私たち高校生が積極的に考えたり判断したりして行動することも大切なのだと改めて知った。そのため、災害時には、自分たちが直面する課題を自分ごととして考える意識を常に持たなければならないと感じた。

また、東松山市の災害公営住宅あおい地区の整備に関わった難波和幸さんのお話も印象に残っている。住宅を建設するにあたり、最初、仏壇は2階にある和室に設置する予定であった。しかし、入居予定者の方から、2階だとお客様が来たときに不便という声があがった。そこで、1階の洋室に仏壇を設置するように変更したという。「仏壇は和室」という固定された考え方を変えることや、高齢者が多いということ considering、1階に和室を設置できるよう先を見通して設計するなど柔軟な発想が大切なのだと感じた。そして、入居予定者の方の意見を最大限に反映して整備を進めた行政のやり方も、私はすばらしいと思った。

3 高校生の私たちにできることとは

私は今回の研修で、災害時、大人の方に任せっきりにするのではなく、自分たち高校生も考えたり調べたりして行動すること、そして固定された考え方に縛られるのではなく、柔軟に発想することの大切さを学んだ。例えば、自分たち紀南高校生は、津波避難のとき浅間山に登る。高校生なら何の苦労もなく登ることができる。しかし、足の不自由な高齢者の方や車椅子の方はどうだろうか。舗装をしていない狭い山道をすばやく避難できるだろうか。私は、このような地域の避難行動要支援者の方の避難を、高校生がサポートしていくべきだと考える。そのためには、例えば、宮城県涌谷高等学校のみなさんと合同で行ったワークショップのように、地域の方も参加して、地震が起きたときのことを、色々な条件でシミュレーションし、いざという時のために備える必要があると思う。

高校生の私たちができることは限られているだろう。それでも、私たちの判断や行動が多くの命を救い、悲しみを抱える方を減らすことに繋がると信じて活動していきたい。

紀南高等学校 1年 堀口 心愛

1 この事業に参加するにあたって

私は、看護師になることを目指している。将来、看護師として災害現場などで人の命と関わる仕事をするために、専門的な知識や技術を事前に学習しておきたいと考えた。また、この地域には、災害時の高齢者への対応など様々な課題があるので、その解決策を考えるきっかけにもしたいと考えた。

2 看護師としての理想像に触れて

私は、石巻赤十字看護専門学校元教員の岩佐郁子さんの「災害医療とこころのケア」の講話が印象に残っている。震災当時、学生と教員合わせて94名がその場に居合わせたのが、すぐに近隣の避難場所である小学校に避難した。小学校では、避難してきた多くの傷病者に対して、教員を中心に丸となって手当を行ったという。津波にのみ込まれて低体温症になった方には、着衣を脱がして学校にある制服やカーテンを着用させ、一日中身体を摩擦したり、精神的疾患を抱えている方には寄り添って安心できる環境を整えたりするなど、個々ができる精一杯のことを行った。この大変な状況の中で、岩佐さんは「土足をなくすこと」「食べ物に素手で触らないこと」に気をつけたとおっしゃっていた。これは、感染症を蔓延させないための大事な対処だと教えていただいた。避難者を始め看護学生や教員など、全員が悲しみや怒り、安堵などの複雑な気持ちを抱える中でも、このような冷静な判断ができることに、私はとても感心した。

その他にも、重症度や治療緊急度に応じた重病者の振り分けを意味するトリアージや、専門的な訓練を受けた医師・看護師で構成されて災害発生直後から活動できる機動性を備えた医療チームであるDMATなど、初めて聞く災害医療の専門用語をたくさん知ることができた。

3 紀南高校の津波避難経路を考えて

研修の中で、宮城県涌谷高等学校の教員の方が、「知識があってもそれを伝えたり行動したりしないと、何も知識がないのと同じである」とおっしゃっていた。この言葉のように、「これから私たちに何ができるのか」を徹底的に考え、一人でも多くの方に発信していくことが、実際に震災で大きな被害を受けた方からホンモノの声を聴いた私たちの役割だと思う。

私はふと、紀南高等学校の津波避難場所への経路が頭に浮かんだ。津波避難場所へは、片側が崖となっている狭い山道を歩いていく。しかし、そこには転落防止柵がないので、私は危ないと感じた。高齢者の方や小さい子どもなどが避難中に誤って転落しないよう、避難柵があるとより安全性が高まるのではないかと思う。また、この山道で崖崩れが発生していたとき、その後の避難はどうなるのかといったことも今後の課題として、私たちは考えていかなければならないと強く思う。

私は、この研修をとおして、新たな視点から物事を考える力や専門的な知識を身につけることができたと思う。今後、これらのことを生かし、将来発生するといわれている南海トラフ地震に備えた対策を少しでも多く行っていくことが、自分や大切な人を守ることに繋がるのだと思う。

紀南高等学校 1年 横辻 胡々乃

1 この事業に参加するにあたって

私は看護師を目指している。そこで、看護師として必要な防災・減災の知識や、震災時の行動についてもっと学びたいと思った。また、実際の災害現場では、自分や周りの方の身を守るために、コミュニケーションや冷静な判断が必要になるだろう。この研修では、東日本大震災で被災した方の話を直接聴くことをとおして、震災を自分ごととして考え、災害時により適切な行動がとれるようになりたい。

2 看護専門学校の教員の方からの教訓

私が特に印象に残っている研修は、石巻赤十字看護専門学校元教員の岩佐郁子さんのお話である。東日本大震災時、看護学校の教員と学生は、地域の方をより高い近くの小学校へリードしたという。そのとき、高齢者を背負って避難したり、小学校へ逃げ込んだ方の案内を率先して行ったりしたと聴いた。そして、小学校には、津波に巻き込まれて低体温症になった方や傷だらけの方が多く集まったという。看護学校の教員と学生は、校内にあった体操服やカーテンなどを代用して治療に当たった。大きな温度計の板を、骨折を固定する副子に代用したそうだ。応急処置であったが、手当を受けた方はとても安心したという。どんな怪我でも、治療してもらえるとというのは安心感に繋がるのである。災害時は、想定外のことが起きたり物が不足したりするため、自分で考え判断して行動したり発想を柔軟にしたりして、臨機応変に対応することが大切なのである。そして、それが多くの命を救うことにも繋がるのだと改めて感じた。

ところで、震災時、一番不足して困ったものは水や食糧、医療器具だと、私は思っていた。改めて質問したところ、岩佐さんは、「情報がもっとあれば良かった」とおっしゃっていた。情報がなくて、不安や恐怖があったというのだ。私にとってこの回答は意外だった。情報社会で生きる私たちにとって、情報から遮断されたとき、どう判断してどう行動するのが課題になるのだと思った。そして、いつ災害が発生しても適切な行動がとれるよう、常に色々な状況をシミュレーションしておくことが大切だと感じた。

3 世代を越えた避難訓練

私は、岩佐さんから、様々な物が不足する中での応急処置の様子を教えていただき、その過酷さや辛さを改めて知ることができた。私は、今回の研修で、テレビや動画で見たり聞いたりするのではなく、自分の五感でホンモノに触れることで、震災の現実についてより理解を深め、自分の考えを大きく変えるきっかけとなった。だからこそ、私は、自分の地域で自分や身近な方を守るためにどう行動するべきか、どういう取組みが必要かを、常に考え続けなければならないと強く感じている。

今後、私は、「高校生だけ」や「地域の大人の方だけ」で避難訓練を行うのではなく、世代を越えてみんなで行う避難訓練を増やしていこうと考えている。岩佐さんからは、看護学生が高齢者の方を背負って避難したというお話を聞いた。高齢者の多いこの地域では、災害時の避難において高校生は大きな力になるはずだ。避難訓練の後で、小中学生や高校生、地域の大人の方が、避難経路や家庭における取組みの改善点を、それぞれの視点で意見を言い合えるワークショップを行ってもよいだろう。そういった取組みが、この地域独自の避難マニュアルづくりに繋がり、多くの方の命を救うことになるのではないだろうか。

令和4年度 学校防災ボランティア事業
活動報告書

編集・発行 三重県教育委員会事務局 教育総務課
〒514-8570
三重県津市広明町13番地
電話 059-224-3301
FAX 059-224-2319